

畑喜朔教授がして下さり、恵与下さった。各位のご好意に  
対し心より感謝申しあげる。

日本対ガン協会は昭和三三年八月に発足（塩田広重会長、  
渋沢敬三理事長）した。四三年より日本対ガン協会賞が設定  
されたが、その第一号は山口喜一氏（四四年死亡）に与え  
られた。

（大阪府豊中市 開業）

## 「麻醉」の語史学的研究

松木明知

### 1

中国三国時代の華佗が全身麻醉下に開腹術を行ったとい  
うことから、「麻醉」という言葉は少なくとも後漢時代か  
らの言葉であると一般的には考えられてきた。

しかし著者の研究によって、事實はそれと大部懸隔する  
こと甚しいことが判明したので報告する。

### 2

華佗の業を伝える「魏志華佗伝」には「醉死の如く知る  
所無し」とあって「麻醉」の語は披見されない。「後漢書  
華佗伝」にも「酔いて覚る所無し」とあり同様である。

「後漢書」「元史」「金史」さらには筆者の閲覧しえた中  
国の詩文にも「麻醉」の語は披見されない。諸橋の「大漢  
和辞典」にも一七〇にも及ぶ「麻」を冠する熟語を掲げて  
いるが、「麻醉」についての中国からの出典を明示してい

ない。

3

華岡青洲もその著書の中では「麻醉」の語を用いておらず、青洲より一五年前に琉球で全身麻醉を行った高嶺徳明の系図にも「麻醉」の語は見当らない。

『古事記』『日本書紀』以来の日本の主な史書、文芸書の中にも披見されないし、一六〇三年ポルトガルの宣教師たちが編纂した「日葡辞書」にも「麻醉」の語は出てこない。

4

「麻醉」の語が中国で造られたものでないらしいことは、De Guignes の「漢洋辞典」(一八五三)に「麻醉」の語が出ておらず、Lobscheid の「英華辞典」(明治十六年)に「麻醉」を意味する Analgesic, Anesthetics, Narcotic に対して、各々減痛薬、止痛薬、迷蒙忘痛法、致睡薬などの訳語を充て、一度も「麻醉」という語を用いていないことでも窺い知ることができる。

中国側の文献を全部調査したわけではないので断言できないにしても、「麻醉」が中国で造語された可能性は比較

的小さいと思われる。

5

『済生備考』は杉田成卿によって嘉永三年(一八五〇)に翻訳出版された上下二巻本である。下巻に含まれる「亜的耳吸法試説」はライプチヒ大学のシュレジンガーのエーテル麻醉に関する独文を、オランダのサールイスが蘭訳し、これを成卿が邦訳したもので、この中に「麻醉」という語が見え、筆者の調査では、これが「麻醉」の最も古い文献である。

現在までの研究では、「麻醉」は杉田成卿による造語である。

このような語史学的研究は、非常に多くの文献を閲覧しなければならず、未だ研究を続行中である。

(弘前大学医学部麻醉科)